日英比較言語学の実践1

――「口」と mouth を使った熟語について――

日　野　資　成

0．はじめに

日本語と英語をさまざまな角度から比較対照する研究分野を日英比較言語学という（特にその違いに焦点を当てる場合，日英対照言語学ともいう）。日英比較言語学と言っても，比較対照にはいろいろな方法がある。両言語の音韻を比較対照する音韻論的研究，形態素や語構成を比較対照する形態論的研究，文のレベルでの比較対照をする統語論的研究，語彙や意味を比較対照する語彙意味論的研究などである。今回は語彙の中で，「口」を使った熟語と mouth を使った熟語を，意味論的観点から比較対照することにより，日米の文化の違いを明らかにしていきたい。「口」を使った熟語と mouth を使った熟語を特に取り上げたのは，それぞれ用例が豊富にあり，しかもその用例から日米の文化の違いがはっきりわかると考えたからである。「口」を使った熟語の用例は『学研国語大辞典』（1978年）より，mouth を使った熟語の用例は A Dictionary of American Idioms（1987年）より引用した。

「口」を使った熟語と mouth を使った熟語を比べるのに，まず「口」と mouth が熟語の中で換喩的に用いられている例を1節で比べ，次に比喩的に使われている例を2節で検討する。最後に3節では，1節と2節で検討した例をもとに日米の文化の違いについて述べたい。

1．換喩的用法

換喩（メトニミー）というのは，同じ語の指す対象が置き換わることである。たとえば，メガネをかけた人に向かって「おい，そこのメガネ」と言った場合，「メガネ」はメガネそのものでなく，メガネをかけた人を指している。もともとかけるメガネを指していた「メガネ」が「メガネをかけている人」を指すようになったので，この意味変化は換喩的変化である。

「口」についていえば，もともとはからだの一部である器官を表すが，それがしゃべる機能を持つことから「ことば」を指したり，飲食する機能を持つことから「味」や「味覚」を指したりするのが換喩的用法である。「口」は，「ことば」を指したり「味」を指したりするが，mouth は「ことば」を指すが「味」は指さない。

「口」を使った日本語の熟語で，「口」が「ことば」を指すものは，次のように非常に数が多い。

(1) 口がうまい，口がうるさい，口がおごる，口が重い，口が掛かる，口が堅い，口が軽い，口が過ぎる，口が減らない，口から先に生まれる，口が悪い，口と腹とはちがう，口にする，口に乗る，口は災いのもと，口ほどにもない，口も八丁手も八丁，口を合わせる，口を掛ける，口を利く，口を切る，口を極めて，口を滑らす，口をそろえる，口を出す，口をたたく，口をついて出る，口をつぐむ，口を閉ざす，口を割る

一方英語にも，mouth が「ことば」を指す熟語がある。

(2) from mouth to mouth（口から口へ→順番に話して）
give mouth to（を言う）
have a big mouth（大声でしゃべる）

日英ともに換喩的用法であるという点で共通しているが，相違点はまず，「口」がことばを指す熟語の方が，mouth がことばを指す熟語よりずっと数が多いということである。さらに，(1)に挙げた「口」を使った熟語のうち，「口がうまい」「口がうるさい」「口がおごる」「口が軽い」「口が過ぎる」

「口が悪い」「口ほどにもない」「口を滑らす」「口を出す」「口をたたく」など多くのものは，「多弁はよくない」という価値観を表している。これは，「沈黙は金」という日本人の考えを反映したものである。一方英語の mouth を使った熟語は中立的で，話すことに対する価値観は特にうかがえない。

「口」が「味覚」を指す熟語は「口が肥える」「口に合う」などで，「口」が「味」を指す熟語には「甘口」「辛口」などがある。英語の mouth には「味」「味覚」を指す熟語はない。

2．比喩的用法

比喩（メタファー）というのは，「あるものを他の似ているものにたとえること」で，たとえば「光陰矢のごとし」は，「光陰（月日）が早く過ぎるのは矢が早く飛ぶようだ」ということで，「光陰」と「矢」はどちらも「早い」という点で似ている。比喩的変化というのは，ある具体的なものから，それと似た抽象的なものへ意味が変化することで，，抽象化ともいう。たとえば，「点」という語は「地点」のように，もともとはある空間における具体的位置を示す語であるが，「彼の言った点は正しい」などのように，あることがらを示す用法に変化する。前者を即物的であるから「もの」，後者のことがらを「こと」という意味範疇でとらえるとすれば，この意味変化は「もの＞こと」と表すことができる。「もの」は目に見え，「こと」は目に見えないので，この変化は具体から抽象への変化である。

さらに，「浅い」「深い」という語は，「浅い川」「深い海」などのようにもともとは物理的空間を表す語であるが，「浅い考え」「深い信仰」のように心理的空間を表すようになる。心理的空間は物理的空間よりも，目に見えないのでより抽象的である。この場合の比喩的変化は「物理的＞心理的」と表す。

「口」，mouth を使った熟語にも，「もの＞こと」「物理的＞心理的」という変化を伴うものがある。それぞれの用例を検討したい。

2.1　「もの＞こと」

「口」を使った熟語のうち，「もの」から「こと」へ変化する例を挙げる。

(3)　口が干あがる（飲食物が得られず口が干からびてしまう→生活ができなくなる）

(4)　口をぬらす（口の中を水でわずかにうるおす→どうにか生活をする）

(5)　口を糊する（かゆをすする→やっと暮らしを立てる）

(3)では，「口が干からびる」という物理的状態から「生活ができない」ということがらに，(4)(5)では「口の中をわずかにうるおす」「かゆをすする」という物理的状態から「やっと生活する」ということがらに変化している。

次に，mouth を使った熟語で，「もの」から「こと」に変化する例を挙げる。

(6)　look a gift horse in the mouth（贈られた馬の口を見る→贈られたものの品定めをする）

(7)　take the bread out of one's mouth（人の口からパンを取り去る→人から生計の手段を奪う）

(8)　born with a silver spoon in one's mouth（口に銀のさじをくわえて生まれる→何でもある裕福な家に生まれる）

(9)　live from hand to mouth（食べ物を手から口へ運ぶだけの生活をする→その日暮らしをする）

(10)　take the bit in one's mouth（馬がくつわのはめを口から取る→思うままに行動する）

(6)は「贈られた馬の口を見る」という物理的動作から「贈られたものの品定めをする」ということがらをあらわすようになった。(7)も「人の口からパンを取り去る」（もの）から「人から生計の手段を奪う」（こと）への変化である。(8)も「口に銀のさじをくわえて生まれる」という物理的な状態から「何でもある裕福な家に生まれる」ということがらに転じている。(9)(10)もそれぞれ「食べ物を手から口へ運ぶ」「馬がくつわのはめを取る」という物理的動作から「その日暮らし」「気ままな行動」ということがらに転じている。

この変化は，「口」，mouth ともに見られるが，mouth を使った表現の方がバラエティに富んでいる。

2.2　「物理的＞心理的」

「口」を使った熟語では，この変化はあまり見られない。「口をとがらす」だけが物理的表情から，不平，不満という心理的状態を表す例である。

一方 mouth を使った熟語にはこの変化が多く見られる。down in the mouth は「口がさがって」という物理的状態が「気落ちして」という心理的状態を表し，leave a bad taste in one's mouth では「口にまずい味が残る」という物理的感覚（味覚）から「悪い印象を持つ」という心理を表すようになる。また，make one's mouth water も「人によだれを出させる」という物理的な状態から「人をうらやましがらせる」という心理的な意味を表すようになり，put one's foot in one's mouth も「足を他人の口に押し付ける」という物理的な動作から「他人の心を傷つける」という心理的な意味に転じている。さらに，heart in one's mouth は「心が口の中にあって」という物理的状態から「たいへん緊張して」という心理を表し，foam at the mouth も「口のまわりに泡がついた」という物理的様子から「激怒して」という心理を表している。butter wouldn't melt in one's mouth は「バターが口の中で溶けない物理的表情」から表向きはすましているが「下心がある」という心理を表す。

この変化を見ても英語の熟語の方がずっとバラエティに富んでいる。

3．まとめ

最後に，１節，２節で取り上げた換喩的用例，比喩的用例をもとに，日米の文化の相違について考える。

まず，１節の換喩的用法で述べたように，「口」を使った熟語の中の「口」は「ことば」を指す例が非常に多い。さらにそのほとんどはマイナスイメージを持っている。日本人が話す器官である「口」に注目し，そのマイナスの

側面を表す熟語を多く作ったのは，多くしゃべる人は口だけで行動が伴わないという日本人の価値観を反映していると考えられる。一方 mouth を使った熟語からは，特に話すことに対する価値観はうかがえなかった。

2節の比喩的用法では，mouth を使った熟語の方が「口」を使った熟語よりもずっと多く，バラエティに富んでいた。アメリカ人の即物的表現力の豊かさを思わせる。

次に，「口」と mouth を使った熟語の中の動作性動詞を比べてみる。「口」とともに使われる動作を表す動詞には「口がすべる」の「すべる」，「口に乗る」の「乗る」，「口を切る」の「切る」，「口をたたく」の「たたく」，「口を割る」の「割る」などがある。しかし，これらの動詞から「(滑り台などを) すべる」「(電車などに) 乗る」「(木などを) 切る」「(戸などを) たたく」「(ちゃわんを) 割る」といった具体的な動作が思い浮かぶことはない。

一方 mouth を使った熟語のうち，look a gift horse in the mouth（贈られた馬の口を見る→贈られたもの品定めをする）の「(馬の口を) 見る」，put one's foot on one's mouth（足を他人の口に押し付ける→他人の心を傷つける）の「(足を) 押し付ける」，take the bit in one's mouth（馬がくつわのはめを口から取る→思うままに行動する）の「(くつわのはめを) 取る」，take the bread out of one's mouth（人の口からパンを取り去る→人から生計の手段を奪う）の「(パンを) 取り去る」といった動作性動詞からは，もともとの物理的意味である具体的な動作を髣髴とさせる。これは，アメリカ人の方が日本人よりも，より行動的であることを反映していると思われる。

最後に，顔の表情を表す熟語に注目してみよう。「口」を使った熟語で顔の表情を表すのは「口をとがらす」ぐらいである。一方 mouth を使った熟語には，butter wouldn't melt in one's mouth（バターが口の中で溶けない表情→いやにすましている，表向きはやさしいが下心がある），down in the mouth（口がさがった表情→気落ちして），foam at the mouth（口のまわりに泡がついた様子→激怒して），make one's mouth water（よだれが出るようす→うらやましいようす）など，顔の表情を表すものが多い。これは，アメ

リカ人が日本人よりも表情豊かに話すことを反映しているのではないだろうか。

参考文献

学研国語大辞典　金田一春彦・池田弥三郎編　学習研究社　1978年

A Dictionary of American Idioms. 1987. ed. by Adam Makkai. New York: Barron's.

Heine, Bernd, Urlike Claudi, and Friederike Hünnemeyer. 1991. From cognition to grammar: Evdence from African languages. In Traugott and Heine eds., vol.1: 149-187.

Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Perss.

Traugott, Elizabeth and Bernd Heine eds. 1991. *Approaches to grammaticalization*. 2 vols. Amsterdam: Benjamins.